

香取市文化財保存館

文化財保存館は、昭和38年^{しょうやま}城山1号墳の発掘調査に伴い、出土した資料の収蔵展示を行う施設として昭和42年から展示を行ってきました。平成25年からは、市内各地から出土した資料を充実させて、いぶき館内において香取市文化財保存館として新たに開館しました。

【旧石器時代】

香取市の人々の営みの始まりは、今から約2万年前に遡ります。今よりも寒冷な時で、現在の北海道くらいの気候と思われます。土器はまだ使われていませんが、様々な素材（石、骨、角、皮革、樹皮、植物繊維など）を使った生活用具があったと思われます。しかし、酸性土壌の影響でほとんどが腐蝕してしまい、遺跡からは石器（ナイフ形石器^{さくき}や削器^{せんとうき}、尖頭器など）のみが出土します。1カ所に長く定住することはなく、食料となる動物や植物を探すため、移動をくり返して生活をしていたと思われます。

【縄文時代】

縄文時代は、草創期^{そうそうき}・早期^{そうき}・前期^{ぜんき}・中期^{ちゅうき}・後期^{こうき}・晩期^{ばんき}と区分され、約1万年以上にわたり続いた時代です。旧石器時代から次第に温暖化が進み、台地上には豊かな森が広がり、海面上昇により現在の利根川や低地のところは大きな内海となっていました。（4頁の約1000年前の様子よりも更に大きな内海と考えられます）動植物、魚介類に恵まれ、多くの集落や貝塚が作られました。特に、黒部川^{くろべがわ}を囲む台地上には、阿玉台貝塚^{あたまだい}（国指定史跡）・良文貝塚^{よしぶん}（国指定史跡）^{しろのだい}・城ノ台貝塚など、全国的に著名な貝塚が多くあります。その他には下小野貝塚^{しもおの}（県指定史跡）^{いそはな}・鵜崎貝塚^{ときざき}（市指定史跡）などがあります。また集落では、磯花遺跡のような時期の異なる2つの環状集落が作られました。



縄文土器（木内明神貝塚）

【弥生時代】

弥生時代は、大陸や朝鮮半島から伝わった稲作により、今まで狩猟採集及び一部栽培を主としてきた縄文時代の生活から大きく変わり、米作りが大きな比重を占めるようになりました。市内では、阿玉台北遺跡で炭化米が確認され、お米を食べていたことが確認できます。水田跡は確認されていませんが、低地の谷津田などで稲作作りが行われたのではないのでしょうか。

【古墳時代】

城山1号墳は全長68mの前方後円墳で、県立小見川高等学校の移転に伴い、昭和38年に発掘調査されました。埋葬施設は後円部に構築された横穴式石室で、古墳の上や周りには人物・犬・家などの形象埴輪や円筒埴輪が並べられ、祭祀に用いられた須恵器や土師器なども出土しています。

石室内からは、木棺片や人の歯、三角縁三神五獣鏡をはじめ、武器（環頭大刀・頭椎大刀・円頭大刀・直刀・鉄鏃など）、武具（衝角付冑・桂甲小札など）、馬具（鞍金具・轡・杏葉・雲珠・辻金具など）、装身具（天冠・耳環・銀製空玉・ガラス玉など）といった、おびただしい数の副葬品が出土しました。

墳丘の形態や出土遺物などから6世紀後半に築造されたと考えられます。また、墳丘規模や副葬品の質・量において本地域を代表する古墳であり、埋葬された人物は、下海上国造もしくはその一族とする説が有力です。

なお、城山1号墳の出土品は昭和44年に県指定文化財に指定され、横穴式石室は城山公園内に移築・復元されています。

三角縁三神五獣鏡

魏志倭人伝には、中国、魏の王から邪馬台国の女王、卑弥呼へ「銅鏡百枚」が下賜されたとの記述がありますが、この鏡はこれと関わりが深い可能性が有ります。邪馬台国の時代からは300年以上もの時間が経っていることから、本鏡は贈与が繰り返され、最後に城山1号墳に埋納されたものと考えられます。

中央には「吾作明鏡」で始まる42文字が見えます。



三角縁三神五獣鏡（城山1号墳）

武器

装飾大刀（環頭大刀・頭椎大刀・円頭大刀など）は権力の象徴として古墳に埋葬されたのでしょう。金銅装の華麗な大刀です。環頭大刀は柄頭が丸い環になっていて、環の中には龍や鳳凰がデザインされています。また直刀の鍔の側面には、銀象嵌による装飾が見られます。



環頭大刀（城山1号墳）

武具

衝角付冑の一部が出土しました。衝角とは、冑の正面が軍艦の舳先に付けられた鋭い先端のように突き出していることから名づけられました。長方形の鉄板は小札といい、革紐でつないで甲や小手などを作ったものです。



冑・甲（布野台古墳）

馬具

鞍金具、轡、杏葉、雲珠、辻金具など馬具一式です。鉄地に金メッキした銅板を張り付けて装飾したものです。



武人埴輪（城山1号墳）

装身具、刀子、懸金具

装身具には、天冠・耳環・銀製空玉・ガラス玉などがあります。刀子は現在のナイフで、鹿の角で作った柄が残っています。懸金具は、せんどうふげんしつがわ 羨道部玄室側のはりいし 梁石の上部左右に、石の間に差し込まれて出土しました。布などを吊るすための金具と考えられています。

土器

後円部中段の円筒埴輪列と同一レベルに粘土が敷かれた箇所があり、そこから重なった状態で出土した土器類です。死者の魂を鎮めるなど、何らかの儀式を行った際に使ったものと考えられます。茶色のものは素焼きの土器で土師器、灰色のものは窯で焼いた土器で須恵器と呼ばれています。

埴輪

城山1号墳では、墳丘中段や後円部上、前方部上に円筒埴輪、人物埴輪、武人埴輪、犬型埴輪、家型埴輪など数多くの埴輪が出土しました。

.....

さんのわけめおおつかやまこふん 三ノ分目大塚山古墳（市指定史跡）からは円筒埴輪が出土しており、墳丘上にはながもちがたせっかん 長持形石棺が3枚残されています。全長123m、後円部径68m、同高さ9.5m、推定前方部幅62m、同7.5mです。千葉県内でも屈指の大きさで、利根川下流域最大の前方後円墳です。5世紀中ごろの築造と考えられます。



三ノ分目大塚山古墳



石枕（大戸宮作1号墳）

石枕

埋葬前の儀式や古墳に埋葬する時に、死者の頭を乗せた枕です。周囲にある小さな穴には、りっか 立花と呼ばれる飾りを立てました。いしまくら 石枕は、成田市から佐原地区にかけての利根川下流域で多く出土しています。

その他

せきみねさき 関峯崎3号横穴、こんどうせいさんぞんおしだしぶつ 金銅製三尊押出仏（県指定文化財）。銅板を型の上に乗せ、敲き出して作った仏像で、一部に金メッキが残っています。東国への仏教伝播を知る上で、とても重要な資料です。



金銅製三尊押出仏（関峯崎3号墳）

7世紀後半になると、古墳の造営が終焉となり、仏教寺院の造営が始まります。市内では、^{きのうちはいし}木内麿寺が造られます。ここで使われる瓦は、^{しみすいりかわらかまあと}約1 km離れた清水入瓦窯跡で焼かれた瓦を使用しました。



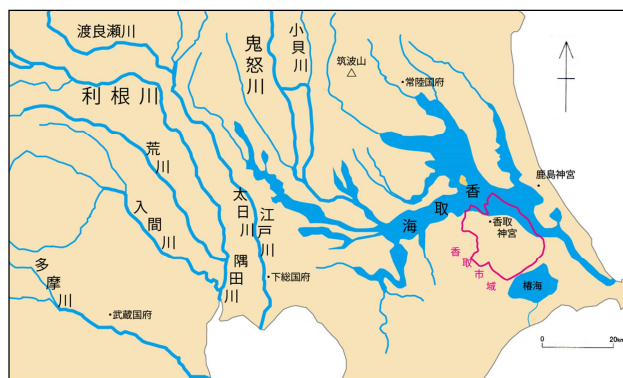
軒丸瓦 (木内麿寺)



墨書土器 (古屋敷遺跡)

【奈良・平安時代】

香取神宮の社伝では、創建は神武天皇 18 年とされていますが、文献上では、8 世紀前半に成立したとされる『^{ひたちふどき}常陸風土記』に香取神宮から分祀した社の記載がある事から、これ以前から香取神宮は存在していたと考えられます。その影響により奈良・平安時代には香取神宮周辺には多くの集落跡があります。吉原三王遺跡（県指定文化財：墨書土器）や古屋敷遺跡からは多くの墨書土器が出土しています。



約 1000 年前の様子

【中世】

大崎城

大崎城（市指定史跡）は、^{こくぶ}国分氏の居城と伝えられています。国分氏は千葉介常胤の第 5 子国分通にはじまり、本矢作城を築城、国分氏第 5 代泰胤の時に大崎城に本拠を移したとされます。

大崎城の裾部の低地からは、木製品（漆器、将棋の駒、^{そとば}卒塔婆、下駄）など、普段台地上の遺跡からは腐蝕して検出されない資料が多く出土しました。

板碑

板石状の供養塔婆の一種で、市内では^{しもうさがたいたび}下総型板碑と呼ばれる多数の板碑が見つかります。県内でも最古級の^{しょうか}正嘉 2（1258）年在銘 1 基（市指定文化財）、^{しょうげん}次年の正元元（1259）年在銘 5 基（県及び市指定文化財）を始め、約 1000 基近くの板碑があります。いぶき館 1 階ガラスコリドー内には、正元元年の板碑が展示してあります。あわせてご覧ください。



板碑正元元年八月廿二日在銘（長泉院跡出土）

~~~~~  
【施設の利用について】 休館日：毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始

入館する際は、いぶき館管理室に申し出てください 入館者のご記帳にご協力ください

問合せ：生涯学習課文化財班 電話 0478-50-1224